

技が輝く

伊勢形紙

伊勢形紙とは、着物の柄や文様を着物の生地きじに染めるのに用いるもので、その歴史は古く、その発祥はつしょうには色々な説がありますが、室町時代末期（一五七〇年頃）には形紙があったと言われています。

江戸時代には、現在の鈴鹿市白子地区を中心に、徳川紀州藩の保護の下に独占企業として、染紙紙製作の振興が行われ、形紙商人は「紀州御用 伊勢形紙」と染め抜かれた堤



名工による匠の技



丹念に彫り抜かれた美しい文様

紙がみ」が、今年の八月に地域団体商標に登録されました。

伊勢形紙は、昭和五十八年に国の伝統的工芸用具に指定されています。

お問い合わせ

伊勢形紙協同組合

TEL FAX 〇五九一三八六一〇〇二六

伊賀焼

伊賀焼の歴史は古く、奈良時代までさかのぼります。平安時代末期から鎌倉時代の初めごろに本格的なやきものの産地として発展し、室町時代の終わりから桃山時代にかけて侘び茶わびちやが広まると、個性的な伊賀焼は茶の道具として注目されるようになりました。主として伊賀國を治めた筒井定次つづいさだつぐや藤堂高虎とうどうたかとらが茶人であったことから、伊賀焼は茶の湯のセンスや心遣いを巧みに取り入れていきました。



素朴で無骨な愛すべき伊賀焼

その後、伊賀焼は江戸時代中期に一時衰退しましたが、十八世紀ごろに京都や瀬戸から技術者を招き、伊賀の土を生かした日用雑器の生産が行われるようになり、現代の基礎が作られました。現在の伊賀焼は伊賀市（阿山地区）の丸柱まるはしらを中心に造られています。製品は土鍋つちかまや行平ゆきひら、食器や茶陶など、多岐にわたります。また、伝統を生かした新製品の開発も行われています。

伊賀焼は、昭和五十七年に国の伝統的工芸品に指定されています。

お問い合わせ

伊賀焼振興協同組合

TEL FAX 〇五九一四四一七〇一

伊勢形紙 伊賀焼

三重県

現在では、着物離れが進み、厳しい状況になっていますが、その生産量は全国の九九%を占め、京都・東京を始め全国各地へ出荷されており、また、近年、染色用具としてだけでなく、美術工芸品としても注目を集めています。

また、伊勢形紙協同組合から地域団体商標の出願をしていた「伊勢型

灯ちん、鑑札かんざつを持ち、全国各地を行商し、「伊勢形紙の白子」が広く知れ渡りました。

伊賀焼の歴史は古く、奈良時代までさかのぼります。平安時代末期から鎌倉時代の初めごろに本格的なやきものの産地として発展し、室町時代の終わりから桃山時代にかけて侘び茶が広まると、個性的な伊賀焼は茶の道具として注目されるようになりました。主として伊賀國を治めた筒井定次や藤堂高虎が茶人であったことから、伊賀焼は茶の湯のセンスや心遣いを巧みに取り入れていきました。